

はじめに

「男性の性暴力被害」と「女性の性暴力被害」。この二つの言葉を見て、どのようなことが思い浮かぶでしょうか。ひょっとしたら、女性の性暴力被害という言葉に対して、「なぜわざわざ『女性の』という言葉をつけないといけないのか」と思った方もおられるかもしれません。

本文中でも述べますが、性暴力とは、同意のない・対等ではない中で行われる性的言動すべてです。性暴力というと、無理やりセックスをされるレイプ被害が一番思い浮かべやすいと思いますが、「いい」と言っていないのに、性器を触られるのも、逆に触らされることも、性暴力にあたります。写真や動画を簡単に撮ったり送ったりできる今の時代、同意のないまま裸の写真を撮られて、そのことで画像が拡散されないうる日々怯えながら過ごさなければいけないようなことも起きていますが、それも明らかに性暴力です。

今書いたことは、女性にしか起こらないでしょうか。否、男性にも十分起こっていることです。性暴力は、どのような人にも起こり得るもので、性的マイノリティの人々も被害に遭っています。

しかしそれならなぜ、男性の性暴力被害は、わざわざ「男性の」と言わないと想像されにくいのでしょうか。そこには、「男は強くあれ」「男は感情を出してはいけない、出していいのは怒りだけ」「据え膳食わぬは男の恥」などの、「男らしさ」にまつわる社会の暗黙の了解が影響していると考えられます。もちろん、個人個人で、あるいは年代や地域によって、そのような意識の持ち方は異なると思いますが、いまだに男性の性暴力被害のサポート体制が十分でないことや、さまざまな誤解があることを考えると、その「男らしさ」（そして「女らしさ」）の呪縛の影響は大きいのではないかと思います。

具体的には、男性の性暴力被害をめぐって「男性は性暴力被害に遭わない」「遭ったとしても女性ほど傷つかない」「女性が加害者だったらラッキーだ」「被害男性はゲイだ」「肉体的に反応したら、その行為を望んでいる」などの社会の思い込みがありますが、これらはすべて間違いです。男性も性暴力被害に遭うし、遭うとやはり大変傷つきます。女

性も加害者になり得ますが、その場合の被害者の影響も深刻なものが多いです。また、加害者・被害者の性的指向は性暴力には関係がありません。性器を触られて、勃起や射精が起こることがありますが、それは梅干しを見て唾液が出るような生理的な反応で、被害者が望んでいる・望んでいないとは無関係です。

本書では、男性の性暴力被害が社会によっていかに見えなくされてきたか、いかに隠されてきたのかという社会との関連に触れ、被害の実態、心身にどのような影響があるのか、被害を受けた後いかに生き延びることができているのか、周りにいる人はどう寄り添えるのか、について述べています。また、被害を受けたけれど、さまざまな理由で「自分は苦しい、自分は怒っている」などと思えない・思っていない・思いたくないと考える男性被害者もいます。もちろんそれはその方の生きてきた個人的な歩みに関わっているとも思いますが、社会の影響もあるのではないのでしょうか。そのことについても本文中で触れています。

本書は、男性の性暴力被害に焦点を当てていますが、女性の性暴力被害は男性よりずっと多く、そのことも引き続き社会として考えていかなければならない問題です。性暴力が

人の尊厳への侵害であることを社会に訴え、社会の意識や流れを変えてきたのは女性たちでした。男性の性暴力被害も、そのような流れがあつてこそ、見いだされ、少しずつ問題意識が共有されつつあります。そういった歴史や現状も踏まえて、社会において男性というセクシュアリティはどう位置付けられてきて、そのことが性暴力を受けること、そこから生き延びることによどのように影響しているのかを考えたいと思っています。

誰でも性暴力の被害者になり得るということは、生物学的な性や性的指向、性自認に係らず被害者になり得るということです。性暴力被害に遭うことで心身ともに傷つくことは、男性でも女性でも、性的マイノリティの人々でも変わりません。しかし、社会の側はさまざまに思い込みや知識不足、理解不足によって、どのような性的なカテゴリーに属しているか（あるいは属さないか）でまわりの反応も、利用できるサービスの豊富さや質も、そして自身の受け止め方も違うのが現実ではないかと思えます。私たちは、あらゆる人への性暴力被害を真摯に考える必要がありますが、この本においては、特に男性の性暴力被害に着目しています。

宮崎は現在大学院で男性の性暴力被害について研究を行っています。当事者の方にインタビューを通じてお話を伺ったり、アンケート調査を行ったりして広く実態を知り、支援のあり方や支援体制を作ることに資すればと思って取り組んでいます。私が男性の性暴力被害をテーマに研究を行おうと決心した2016年頃に、個人的に男性や男児の性暴力被害について気づかされるのがいくつかありました。一度大学院で勉強をした経験があったため、この問題を探ろうと文献を探してみました。簡単に手に入る情報が限られていることに驚きました。普通、興味を持って何か情報を探すと、それについての入門書や研究論文が束で見つかることが多いからです。また、性暴力や性的虐待の本には、男性や男児も性暴力被害に遭うことが簡単に触れられているものもありましたが、少なくとも日本では体系的に研究されているテーマではないということが分かり、しっかり理解したいと研究を志しました。

本書でも繰り返し出てくるように、ジェンダーやセクシュアリティがさまざまに影響している男性の性暴力被害には、常に加害や社会的な特権との関係が浮上します。しかし一方で個別の性暴力被害体験は深く人を傷つけています。男性であることと性暴力に遭った

ことをうまく結びつけられないということが、男性の性暴力被害という問題の根幹にあるように思います。

性のあり方は多様であるのにもかかわらず、「男性の」と男女に二分した形容をするのは包括的な発想ではないと思います。ですから本書では、個別的な経験や多様な性のあり方が全く度外視され、男女に区分され、異性愛を中心とする社会を批判的に検討したいと思っっています。「人は誰でも性暴力被害に遭う」と言ってみても、男性の性暴力被害の存在の想定されなさや見えづらさには、やはり社会的な力がフィルターのように第三者の見え方に影響していると思うのです。

男性の性暴力被害が問題であるというよりも、「男性の」と付記しなければ理解することが難しい我々の認識の仕方が問題だと考えることができるのではないのでしょうか。

西岡は、2015年8月より京都性暴力被害者ワンストップ相談支援センター（通称京都SARRA）で支援員として活動し、現在は、京都SARRAに相談された被害者の公費カウンセリングも行っているウイメンズカウンティング京都に所属しています。活動をする

中で、男性の性暴力被害者のカウンセリングを行ったり、電話相談に応じたりしてきました。大学や大学院在学中には、男性の性暴力被害については未知なことが多いと感じ、男性の性暴力被害者の方々にインタビューをさせていただきました。西岡の個人的な関心は、最初は女性に対する暴力であったのですが、男性の性暴力被害のを知るにつれ、時には命に関わるような深刻な影響を被る体験にもかかわらず、社会的認知の低さや誤解の大きさを感じ、放っておけないという思いを持つようになりました。この本をお読みくださった方々に、男性でも性暴力被害に遭い得ることやその影響は決して軽いものではないこと、そして男性の性暴力被害のリアリティをご理解いただけることを祈っています。

また、当事者の方々がこの本を手にお取りくださることもあろうかと思えます。まずは、お手にしていただいたことに感謝申し上げます。私たちとしては、実態や影響、いかにして生き延びることができるのかについて可能な限り網羅的に書いたつもりですが、ご自身の経験や体感と違っていたり、読んでいて違和感や怒りに近い感情すら抱かれたりすることもあるかもしれません。今書いたことと矛盾するようですが、私たちとしては本書を「男性の性暴力被害」の完全版であるとは考えておりません。議論の余地があることも多々

あるでしょうし、私たちが気づいていなかった視点もあると思います。願わくは、本書を通過点として、さらに社会的な議論が起こり、より男性の性暴力被害のリアリティに沿うような本や研究が出てきてほしいと思います。

なお、本文中では、被害を受けた方については「被害者」「被害当事者」と表現したいと思います。筆者（西岡）としては、男性の性暴力被害についての知見が少しずつでも積み上げられているのは、男性被害者の方々が、痛みを伴いながらも声を上げてこられたからだと認識しています。声を上げてこられた方も、一人でその体験を抱えて生きてこられた方も、生き延びてこられたこと自体に敬意の念を抱いていますが、本文中では、男性が性暴力被害を受けるといふことのリアリティをすべての読者の方にかけていただきたいので、「被害者」「被害当事者」という、より一般的な形で記述したいと思います（ただし、第4章「生き延びる過程」においては、より個別具体的な「被害当事者」を想定して書いている部分があり、そこではこの限りではありません）。

まずは性暴力そのものが起きないことを願いたいですが、それはどのような人にも起こり得ることです。そのような世の中に生きる一人の人間として、また、非力ながらも男性

の性暴力被害者の方々の支援に関わる者として、性暴力を受けた男性の方々が、身の上を起こったことがどんなことであるのかを自身の中で定義でき、その方の望むタイミングで自身を癒やしたり、その方が必要とする支援を無用に傷つくことなく受けられたりすることを心より願っています。本書が、その一助となれば大変嬉しく思います。

なお、本書の中で出てくる事例は、筆者らが活動の中で出会った実際の事例の傾向に基づいて作り上げた完全な架空事例です。性暴力被害は大変デリケートなものでもあり、守秘義務は厳密に守られる必要があります。そのため、このような事例の提示の仕方をしておりますが、十分に起こり得るリアリティを持っております。

本書は、最初からお読みいただいても、興味のあるところを拾い読みしていただいても構いません。また、読むのがつらくなれば、いったんページを閉じて、本から離れてください。よほどつらいようであれば、ひよっとしたら自分の中にある性暴力被害にまつわるつらい記憶が顔をのぞかせているのかもしれないかもしれません。そのような場合は、巻末の全国のワンストップ支援センターの一覧表を参考になさってください。